

編集後記

毎年この季節になると卒業論文や修士論文を読まされる。ここ数年の学生の論文がどうも編集子の波長と合わなくなってきており、査読や添削が辛く感じていた。何だか論文のページがスカスカなのだ。中身を吟味する以前に、物理的に空白部分が多すぎるのだ。とくに方法や結果の部分がそうなのだ。広告のコピーのような、そして見出しを多用した単語を並べた文体なのである。本号の編集中に同じようなことを書いている原稿に出会って、こう感じているのは自分だけではない、ということを見つけて妙にホッとした。学生の論文のその他の部分を読んでみると、何かずらずらと眼が追従しない。よく見ると、読点がそこかしこに使われている。声に出して読んでみると、研究室や教室での学生の会話のリズムなのである。ちょっとイントネーションを変えてみると、60年代の学生紛争での演説が彷彿としてきた。

期末試験の穴埋め問題をマルチョイ形式から自由記述で解答を求める形式に変えてみた。その出来の悪さに愕然とした。漢字はおろか、ひらがなでさえ解答できないのだ。イライラの採点どころかスラスラの採点となってしまった。同僚と、センター入試の落とし子のやることだから仕方ないと片づけられないね、と嘆息した。その先は途方に暮れている。ピーター・フランクルの「日本人のための英語勉強術」に、英語をつかって日記を書く、というくだりがあった。編集子はここ数年間、身体活動の記録を日記につけている。そこでは走ったキロ数、時間、消費カロリーなどの数値を中心に書いている。昨年分ををひも解いてみて、なんじゃこの文章は、と我ながらあきれてしまった。

フォーラムの特集ではこれまでに筑波大学の教養科目である、外国語、情報処理、国語について扱ってきた。残るは体育ということになる。次号では「からだの教育を考える」のテーマのもとで高等教育での体育について見ていくことにした。

(高井省三)